
可愛いうさぎちゃん

泉夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可愛いうさぎちゃん

【著者】

N6265Y

【作者名】

泉夏

【あらすじ】

異世界にやつてきたうさぎちゃんと飼い主のお話。

私の朝は早い。

まず自分の身支度をすませ、軽く朝ご飯を食べる。

次にお仕えする主の用意。

ゆっくり寝ていればいいものを、妙に早起だから困る。

「つさぎ、なにをぐずぐずしているんです。それと準備なさい。
「はい、申し訳ございません……すぐ参ります……」

ああ、今日はもう起きてるよ。

しかも機嫌が悪いらしい。

やだなあ、ハツ挡当たりされたら。

「ヒカル王國

そう、日本ではない。

もつといつと地球でもない。

何故こうなったかさっぱりわからない。

ちなみに私は“つさぎ”ではなく人間だし、そういう名前でもない。
ではどうしてそう呼ばれているかといつと…

真っ白で長いふかふか耳。

お尻にも真っ白なふわふわしつぽ。

ただしこれは本物ではない。

人間なのだから当たり前だ。

所謂バニーガールという恰好である。

私の名前は佐伯結依、25歳。

しがない派遣社員だつた。

給料なんて微々たるものだつたので、夜のお仕事もしていた。その仕事着がコレである。

バーーガールの恰好をした女の子がお客様と楽しくお酒を飲みながらお話しする。

お触りはなし、ということになつていたが、そこは・・・ねえ。まあ、私はそんな輩にはかるべく制裁を加えていたが。

あの日は休憩中にふと「ミ袋」が田に付いたため、ちょっと外まで捨てに行こうかと思つただけだ。

ちょうど外の空気も吸いたかつたし、ついでとばかりに。「何がいけなかつたの? ねえ、神様よお。

少し重い「ミ袋」を一旦床に置き、ドアを開ける。

外にある重石でドアを固定しておいつと外に出た、が、あら?

あら?

目の前は薄暗い路地裏ではなく、木で縁がいつぱいだ。

ピンヒールのかかとが気持ち埋まつていてる気がするのはせいどないようだ。

だつてコンクリートではなく、土。

「え。」

自分の足を疑つて、とりあえず後ろを振り返つてみたが、そこにはあるはずのドアがなかつた。

「・・・」

私はしばらく呆然としていたと思つ。

なにがなんだかわからない。

しかもこんな恰好だし。

周りを見渡すが、木、木、木。

森？いや、森に行つたことがないからわかんないけど。とりあえず、どこかに続く道はあるようだ。

現に私がいる場所もちょいどその道の上。

これが本当に木々の中に放り出されていたら大変だつたらつ。さて、このままここにずっとといるわけにはいかないのだが・・・。

「右に進むか左に進むか、だよね。」

これつてけつこう重要な気がする。

残念なことに都合よく看板が立つてているわけでもない。

「うーん。ここはアレを使うべき？」

端によつて小枝を拾い、地面に垂直になるように指で先を支える。指を離して倒れた方に進むというアレである。

「でもこれ道じやない方に倒れちゃつたらダメだよねー。」

危惧した通り、中々思う一方向に倒れてくれない。

そんな傍から見たらくだらないことを夢中でやつていたため、近づいた気配に気付かなかつた。

相当キテたんだと思う、私。

「何をしているのです。」

「わあっ！！」

突然後ろから声をかけられ非常に驚いた。

ビクーっと体を震わせると、不安定な体勢でしゃがんでいたため、尻餅をついてしまつた。

しかもお尻には尻尾が付いていて、変に厚みがあり余計に痛かつた。

「つたあー。」

「おや、大丈夫ですか。それにしても色氣がないですね。きやーとか言えないのですか。」

きやーなんて言えるか、つーか本氣でびびつたら可愛げのある声なんて出ないとと思う。

「もう、なに？」

体勢を崩したまま仰け反つてみると、男が立っていた。

「何をしているのかと聞いたのですよ、うさぎさん。」

「は。」

本日一度目の呆然。

どう見ても日本人ではないし、容姿も恰好も変だ。いや、私も恰好は変だがそれはこの際措いておく。

銀の長髪に紫の瞳。

黒いロープ？マント？から覗く服は白のゆつたりとしたワンピース？それはそれは綺麗は男だった。

これは一体・・・。

「困ったうさぎですね。」

そのままの体勢で動かなくなつた私に呆れると、ふわりと持ち上げて立たせようとした。

「え、あ。す、すみません。」

が、ヒールでよろめいてしまい、後ろにいる男に寄り掛かつてしまふ。

「どうやらこの耳は偽りのようですね。といつゝとはこの尻尾も。」

「え、当然でしょ、おつー？」

「うん、肌触りがあまりよくない。」

私の頭に付いている耳をふにふにと触つていたかと思うと、正面を向かされ、尻尾を含むお尻を撫で始めた。

なにこの人ーー！

抵抗して放れようとするが、腕をがっちり回され身動きがとれない。

「ちょっと！やだ放してー！」

男女の力の差か、びくともしない。

無駄が嫌いな私は早々に諦め、大きなため息を吐く。

落ち着け、なんだか怪しいが人に会えた。

とりあえずこの人に頼るべきだ・・・よね？

会社や店のいやーなおっさんに比べたら全然まじじゃないか。

やつてることはアウトだが、顔がセーフだ！

我慢だ私！と自分に言い聞かせた。

そんな様子を見ていた男は、身を屈めたかと思うと私の本当の耳にそつと息を吹きかけた。

「ひゃあっ！」

思わず出た声に恥ずかしく思い、近くなった男の顔をきつと睨みつける。

すると男はにっこり笑って言った。

「出るじゃないですか、いい声が。」

「狭い所ですが、どうぞ。」

「・・・お邪魔します。」

「おや。大丈夫ですか、なんて聞くまでもなさそうですね。このまま抱えますよ。」

「うう・・・」

男の名前はアルジャンといった。

横文字が苦手な私は、長つたらしい名前を覚えることは無理なので、家名は早々に放棄し覚えていない。

とりあえず、話を聞くにしてもこんな森の中について仕方がないとということで、彼の家に招かれた。

なんと驚いたことに、彼は魔術師だというのだ。

魔術師、ということは魔法が存在するのである。

初めは、何言つてんだよと彼を変な目で見てしまつたが、私がこんな所にいる時点でそれもありなのかもしないとほんやり思つた。つい今しがた、その魔法とやらでこの場所にやって來たのだ。

あの場所からこの家まで歩いて2~3時間は優にかかる距離らしい。なのにこの便利さ。とは思ったが、どうも体がソウイウモノに慣れていないようで気持ちが悪い。

あれだ、乗り物酔いみたいな感じだ。

そんなグロッキーな状態の私を本当に心配しているかは疑問だが、アルジャンは私を抱えベッドに寝かしてくれた。

「こんなことぐらいで気分が悪くなるとは。詳しい話は後にしてしまう。とりあえず休んでなさい。」

彼は私の頭をポンと軽くたたくと、そのまま部屋を出て行ってしまった

つた。

ふかふかで肌にとても馴染む寝具に包まれていると、安心したせいか涙がぽろりといゝぼれた。

「・・・あれ。」

「気付くと次々と溢れてくる。」

「つづり、うう~。」

おかしな所にくるわ、魔術師に会つわ、気持ち悪いわで一気に頭がぐちゃぐちゃになつた。

誰もいのをいいことに私はわんわん泣いたのである。

だから扉の向こうにアルジヤンがいたなんて気づきもしなかつた。

「せつかく水を持つてきたのですが、これでは入らない方がいいでしょつねえ。」

手元の盆には水の入つたピッチャーとグラス、そして濡れタオル。

泣き声は弱まる様子を見せない。

時々罵声らしきものも聞こえてきて、ため息が出る。

「やはり色氣がない。・・・まあ、しばらくそつとしておきますか。」

「

いつの間にか泣き疲れて眠つていたらしい。
起き上がるが、タオルが枕元に落ちていた。
ナイトテーブルには水。
アルジヤンが置いて行つてくれたのだろう。
寝たおかげで気分は良くなつたが、喉がカラカラだ。
あれだけ泣いたのに、目蓋があまり重く感じないのは、タオルのおかげのようだ。

有難く思い、水も一気に飲み干す。

「ふう。おいしい。」

落ち着いたところで、辺りを見回すと、すっかり夜だ。

カーテンが開けられていたため、月明かりで部屋はそこまで暗くはない。

とりあえずこの部屋から出ようとした時に、いきなり扉が開いたのでビックリした。

「ようやく起きましたか。寝すぎですよ。」

どうやら起きたことに気づいていたらしくてこうか、心臓に悪いからノックくらいして欲しかった。

部屋を出ると、そこはリビングルームのような所だった。テーブルに椅子は一脚だけ。

すぐそこにはキッチンも見える。

「ここにはあまり人が来ないのでたいしたもののは出せませんが。」

そう言って、カップを差し出した。

中身の液体は黒い。

なんだコレは、・・・」「コーヒー？」

それにしてはちょっとドロッとしてないか？「ココア？」

変なものは出さないだろうとは思いつつも、アルジャンを見てしまう。

「なんです、その顔は。」

「ええと、これはなんという飲み物でしょうか。」

「はあ？・・・本気で聞いてるのですか？」

「本気です、大真面目です。」

しばし沈黙。

彼は訝しんでいた顔を憐れむような顔に変化させた。
なんかすごくムカつく。

「これはヌワグレスという飲み物です。苦味がありますが、美味しいですよ。」

「ヌ、ヌワ？」

「ヌワグレヌ。」

「ヌワグレヌ・・・。言いにくいなあ。」

くんくんと匂いをかぐと、コーヒーに似た香りがする。美味しいという言葉を信じて、恐る恐る口に含む。

「あ、コーヒーだ。」

「コーヒー？君がいた所ではそう呼ぶのですか？」

「全く同じものとは言えないですが、香りと味はほぼ同じですね。」

「・・・コーヒー・・・。」

そう呟いたきり、アルジャンは黙ってしまった。

何かを考えているようで、私も黙るしかなく、大人しくヌワグレヌをちびちびと飲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6265y/>

可愛いうさぎちゃん

2011年11月24日20時46分発行